

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16742

研究課題名（和文）ミュージアムにおける演劇創作-コレクション活用とコミュニケーション創出の方法論

研究課題名（英文）Theatrical creation in museums: methodology for utilizing museum collections and enhancing museum communication with visitors

研究代表者

松田 鮎美（寺田鮎美）（TERADA, Ayumi）

東京大学・総合研究博物館・特任准教授

研究者番号：50466869

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ミュージアムの空間内で取り組む、展示物を着想源とした演劇創作について考察した。ミュージアムと演劇との協働に着目することにより、これまでになかった芸術表現創造の促進、及びミュージアムコレクションの新しい社会的活用法の提案を行ない、演劇を媒介に作り手（俳優・ミュージアムスタッフ）と受け手（来館者）との間に双方向のコミュニケーションを創出する意義と、そのための文化政策的課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミュージアムの展示・教育と演劇との関わりについて、コミュニケーション論的観点からの理論的検討を行なったことには、博物館学分野の新たな研究領域としての学術的意義が認められる。また、演劇創作による新たな文化的創造のためのミュージアムコレクションの利活用について検討した本研究の成果は、コレクションの収集・保存から展示・活用へと力点が移行しつつあるミュージアム運営の今日的課題にこたえる点に社会的意義が見出される。

研究成果の概要（英文）：This study explored the possibility of theatrical creation inspired by museum exhibits. Case studies demonstrated that collaboration between museums and theatres could help create new artistic expressions and also establish innovative methods for utilizing museum collections. The study explicated the significance of, and methodology for, enhancing communication between actors/museum staff and museum visitors by means of theatrical creation.

研究分野：文化政策研究、ミュージアム論

キーワード：ミュージアム 文化政策 現代演劇 芸術表現

1. 研究開始当初の背景

本研究では、ミュージアムの空間内で展示物を着想源として演劇を創作する可能性について検討を行なった。この研究課題を構想するに至った背景には、次の二点が挙げられる。

一つは、ミュージアムの役割の変化である。ミュージアムは20世紀以降、モノの収集や研究のみならず、展示や教育活動を担う公共的な文化施設として発展してきた。その傾向がよりいっそう強まる今日、ミュージアムはかつてないほどに多様な人々の利用に資する社会的責任を担った機関へと変化しつつあり、新たな展示手法の開発や教育プログラム及びイベント等の充実が追求されている。

もう一つは、現代演劇の表現の多様化である。現代演劇は、これまでの古典劇や新劇等を踏まえ、芸術創造として常に様々な新しい表現を試みてきた。その中で、劇場空間以外の場所で公演を行ない、社会との新たな関係構築を模索する事例が近年増えている。

そこで、ミュージアムと演劇が協働し、社会における新たな文化的価値の創出に取り組むことは、これまでない芸術表現を生み出す可能性があるとともに、両者の社会的存在意義を高めると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、ミュージアムと演劇との協働に着目することにより、これまでない芸術表現の創出を促し、同時にミュージアムコレクションの新しい社会的活用法を探ることを狙いとした。

そこで、本研究の目的は、コレクションの収集・保存から展示・活用へと力点が移行しつつあるミュージアム運営の今日的課題にこたえとともに、演劇を媒介に作り手(俳優・ミュージアムスタッフ)と受け手(来館者)との間に双方向コミュニケーションをミュージアム空間内で創出する意義を明らかにするものとした。

この研究目的のもと、本研究では、ミュージアムにおける演劇創作の可能性について、1)従来のミュージアムがコレクションを利用してきたのとは異なる文脈や目的を設定することで実現するコレクションの活用、及び2)演劇という芸術様式を介した作り手(俳優・ミュージアムスタッフ)と受け手(来館者)との間の新たな相互コミュニケーションの創出の2点に着目し、学術的に考察を行なった。

本研究の成果は、本研究代表者がミュージアム内で取り組む、実際の演劇創作活動に還元していくものとした。

3. 研究の方法

本研究の方法は、次の二つを柱とした。一つは、文献調査や先行研究の既存データの分析による理論的研究、もう一つは、インタビュー等を用いた社会調査や公演記録等の事例調査による実践的研究である。

一つめの理論的研究については、ミュージアムの展示に関する利用者ニーズ把握のための文献・データ調査、国内外の現代演劇動向の把握のための文献調査、ミュージアムにおけるコレクション活用及びコミュニケーション創出に関連した文献調査を実施した。

二つめの実践的研究については、国内外の現代演劇動向についての聞き取り調査、ミュージアムにおけるコレクション活用及びコミュニケーション創出に関連した国内外の事例調査、さらに、本研究代表者が演出家・俳優とともに、実践としてミュージアム空間内で取り組む演劇創作事例について、ミュージアムにおける演劇創作の評価を目的とした観覧者対象の社会調査を実施した。

4. 研究成果

本研究を通じて、次の6点が明らかになった。

(1) ミュージアムの役割

ミュージアムの活動の重心が「収集」から「活用」へと移行してきた背景の整理をした結果、ミュージアムが長年に亘り保存してきたコレクションは、その周辺の知的財産とともに、社会全体にとって重要な活用すべき資源であるという価値認識が人々の間で高まっていることがわかった。したがって、ミュージアムが有するコレクションや知的財産という資源を人々のためにいかに有効活用するかは、現代社会におけるミュージアムの重要課題の一つとなっている。

(2) ミュージアムにおける演劇の既存の活用例

ミュージアムで演劇が行われる既存の事例の一つには、展示の解説、あるいは展示に基づく物

語を語るものが挙げられる。この場合、ミュージアム内の演劇は音楽・動き・視覚性・ユーモア・悲哀・詩情等の多様な要素が一体となり、人間の知性に訴えかけるため、個人にとって印象深い体験を提供し、展示を理解する学習効果が高いという教育的意義がある。

(3) ミュージアムコレクションの活用とコミュニケーション創出に関する既存の取り組み

ミュージアムにおけるコレクションの活用とコミュニケーションの創出には、二つの重要な動きがみられる。一つは、1960年代以降、アメリカを中心にチルドレンズ・ミュージアムでハンズオンの展示手法が開発され、発展してきたことである。もう一つは、1980年代から始まったニューメディアと呼ばれるデジタル化の取り組みである。特に、ハンズオンは、「見る」だけだったコレクションに「触る」という活用方法を拓き、展示に体験性を与えた画期的な鑑賞・学習補助ツールとして認められている。

しかし、ハンズオンで触れられるものは限りがあり、また触るだけではそこに学習効果や新たな意味が生まれるとは限らない。また、デジタル技術はミュージアムコレクション特有の物性と切り離しても成立可能であり、モノと人、モノと知をどのようにつなげるかという点は、技術革新が進みつつある今でも、本質的な問いとして残っている。

(4) 非劇場空間における演劇創作の利点と課題

演劇関係者(演出家や俳優等の実践家)にインタビュー調査を行ない、非劇場空間における演劇創作について、回答者の経験に基づく事例を収集し、記録化した。主な質問は、劇場空間での演劇経験と比較して、苦労したことや新たに達成できたこと、観客や関係者の反応で特に印象に残っていることとした。

ミュージアム空間での演劇創作に参加した経験のある俳優の例では、ミュージアムにおける演劇創作では、ミュージアムの展示物や空間との関係づくりが苦労した点であり、また新たに達成できたことであったとの回答が得られた。また、観客の反応では、俳優側が動くだけでなく、展示物との関係づくりが成功した場合に観客が自由に動いてくるという点に対し、ミュージアムでの演劇の新しさの可能性を感じたとのことであった。

そのため、俳優や演出家という、ミュージアムの外から入り込んだ人々が、ミュージアムやそのコレクションとの関係づくりを掘りさげる体験を得ることに利点が見出されると同時に、それをいかに行なうかは個人の経験や能力に依存しているため、方法論としては存在しないことが課題であることがわかった。

(5) ミュージアム空間内における演劇公演のインパクト評価

2017年11月から12月には、本研究の成果を実践に還元する機会として、東京大学総合研究博物館・インターメディアテクにおける演劇プロジェクトのパフォーマンス公演『Play IMT 7 インビトウィーン・ワールド』を実施した。その際に、観覧者を対象としたインタビュー及びアンケート調査を行ない、ミュージアムにおける演劇創作が人々のミュージアム体験にどのような影響を与えていたかに関するデータを収集した。

その結果、来館回数は、初回来館者が多数を占め、パフォーマンスが行なわれることを知って、初めて来館した人が多くいたことがわかった。一方、パフォーマンスの実施を知らずに来館していて、たまたま目にした観客もいたことが示された。

インタビュー調査結果のうち、事前情報無しに、偶然パフォーマンスに遭遇した来館リピーター5人による、印象に残った点に関する自由回答では、パフォーマンスが想像力を喚起し、ミュージアムの展示物とパフォーマンスの組み合わせで、いつもとは受け取り方が変わる体験が挙げられていた。同じ回答者が、ミュージアムの空間や展示物に注目した場合に、今回のパフォーマンスを観て気づいたこと・考えたことを尋ねた質問に答えた記述では、ミュージアムの空間や展示物と演劇との奇妙なマッチ、通常の劇場やミュージアムでの体験にはない新鮮さ、観客とのつながりを発見したというコメントがあった。

以上から、来館者にとっては、演劇公演がこれまでそのミュージアムに来たことがない人が来館するきっかけとなるほか、演劇を見ることを目的としない来館者にとっても、展示物や展示空間に対する新たな見方や認識が生じることがわかった。

(6) 今後の課題

従来のミュージアム展示による一方通行のコミュニケーションではなく、演劇を媒介とした双方向コミュニケーションが生まれることには、ミュージアムの役割の変化及び現代演劇の表現の多様化に直面している、ミュージアムと演劇の両者にとって、新たな展開可能性が見出される。すなわち、ミュージアムが演劇を含む様々な表現メディアを積極的に利用していくこと、演劇が創作の着想源やプロセスをよりいっそう多様化させていくことなどが期待される。このように、ミュージアムにおける演劇創作は俳優や来館者にとって新たなミュージアム体験を創出することを可能とし、コレクション活用及びコミュニケーション創出の可能性を開くための有効な方法となりうる。

この方法論の継続的な実践のためには、コレクション保存を妨げない線引きの検討、ミュージアムと演劇関係者との接点づくり、コラボレーター同士の意思疎通などが必要であり、方法論の普及のためには、これらの指針作りが研究課題となる。さらに、今後のミュージアム像として、

演劇やパフォーミングアーツの創作とミュージアムコレクション活用を結びつけ、ミュージアムと利用者や利用者同士の新たなコミュニケーションを創出するためには、静粛を求めるミュージアムマナーに代表される、ミュージアムと音に関する既存の価値観の変化を促すような実践の推奨が文化政策的課題となりうる。これについては、今後の研究課題に引き継ぎ、考察をさらに深めるものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 A. Terada
2. 発表標題 The origins of noise etiquette in museums in Japan
3. 学会等名 26th Annual Japan Studies Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺田鮎美
2. 発表標題 演劇による新たなミュージアム体験の創出 「Play IMT」を事例に
3. 学会等名 日本ミュージアム・マネジメント学会第23回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 A. Terada
2. 発表標題 The sound layers project: exploring a new auditory experience in a museum
3. 学会等名 The Association of Academic Museums and Galleries (AAMG) and the International Council of Museums' Committee (ICOM) for University Museums and Collections (UMAC) 2018 Joint Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 A. Terada
2. 発表標題 Activating university museum collections through a theatrical play
3. 学会等名 17th Annual University Museums and Collections (UMAC) Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----